

夏期講習だより

第4号

文責 村田 将一 (西春近南小学校)

6月20日(火) 第3回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第3回読み合わせ 令和5年6月20日(火)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部 「善の研究」

第一編 純粹経験 第三章 意志

司会者： 加藤 優樹 先生 (伊那小学校)

レポーター： 降旗 奈穂 先生 (美篤小学校)

<降旗 奈穂先生レポートから>

- ・動作は必ずしも意志の要件ではない、或る外界の事情のため動作がおこらなかったにしても、意志は意志であったのである。P98. L1~2
- ・純粹経験の事実としては意志と知識との区別はない、共に一般的或るものが体系的に自己を実現する過程であって、その統一の極地が心理であり、兼ねてまた実行するのである。P104.L7~9
- ・余は最も具体的なる経験の事実に近いものが真理であると思う。P105.L3

第3章「意志」とは

第三章から、ありのままの“その子”の具体的な言動の裏にある背景・願い・過程に思いを寄せ、みとっていくことが大切だと感じました。しかし、それがなかなかできず、子どもたちが下校して静まり返った教室で「あの時ああすればよかったな」の反省の連続です。

「大丈夫、自分でできる」と言ったKさん

Kさんはうまくいかないだろうと予測のつくことや難しいと感じた際に、ギャーと泣き叫び、机をひっくり返して教室から飛び出します。その裏にはきっと、“できるようにになりたい”“伸びたい”と願うKさんがいるはずだ、その気持ちを大切にしたいと思っていました。しかし手立てがなかなか支援にちよっけつしません「わがままな子だなあ」「困るなあ」という思いでいっぱいでした。ある日の清掃後に行う昼の学習で、2桁同士を足すひっ算のプリントをやっていた時に、ふいに私の膝の上に乗って来たKさん。いつもだったら絶対やらないのに・・・びっくりしましたが、いつの間にか「一緒にやってみようか!」と声を掛けていました。Kさんは頷き、一緒に学習スタートです。一の位から計算できるようにするため、十の位を指で隠すといったサポートはしましたが、最期はほぼ自力でひっ算に取り組むことが出来ました。家で宿題に取り組むことが難しく学校でやってしまうことが多かったので、「今日も宿題やってくか!」と言ってみたところ、「うん大丈夫、自分でできる」と満足そうに自分の席に戻っていくKさんの姿がありました。その時、わがままで困った子という色眼鏡から抜け出せない自分がいたことに気が付きました。もしかしたら“自信をもって学びたい”という思いをもちながら着々と学習に取り組むクラスメイトを遠くから見ているのではないかと、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。“目の前にいるその子”と向き合っているか。Kさんから、ガツンと問いかけられたようでした。

最後に

テキストを読めば読むほど、何が分からないのか分からなくなり、レポートを書き始められずにいました。しかし「①自身の在り方(子ども観や教師観など)を更新していく」「②自分自身を振り返ってよりよく生きようと願う」が“哲学する”よさなのではないかと気付きました。西田哲学と正面から向き合い、改めてレポーターに朝鮮してよかったと感じています。

◎「意識の範囲は決していわゆる個人の中に限られておらぬ、個人とは意識の中の一小体系にすぎない」

P107.L11

◎「この大なる体系が自己であり、その発展が自己の意志実現である。」P107.L13

第三章の中で、特に印象に残っている箇所です。他者の存在なく自分やその周りのことを語るのとは不可能だと感じました。学校生活で置き換えると、子どもなしには教師（私自身）は存在せず、子どもたちや周りの人、環境によって教師（私自身）が生かされているということでしょうか。見えないものを見ようとする。子どもたちの願と私自身の願いを前向きにとらえ、それらを紡いでいこうとする気持ちを大切に、日々研鑽を積んでいきたいと思えます。

<グループ討議から>

○主より客にいくのが意で、客より主に來るのが知であるというような考えも出てくる。

○どうしてKさんが膝に乗ってみたのかその「意志」が知りたい。無意識的に乗ったのか、何か意識的に乗っているのかを是非知りたい。

○これまでの経験から膝に乗ってみると「何かやってみよう」と思えたのではないかな。

○意志の実現とか真理の極地とかいうのはこの不統一の状態から純粹経験の統一の上体に達するのが謂である。→理想が主、実現が客<唐澤先生より>

○外界の変化により、子どもたちの知が深まっていくのではないかな。

○色眼鏡をもつのではなく、純粹な目で子どもたちを見ていくことが大切である。

○子供たちの行動だけ見て対応するのではなく、その子の背景や状態から関わっていけることを目指したいと感じた。

<唐澤 正吉先生から>

○降旗 奈穂先生のレポートにおいて、はじめと最後にの部分から西田哲学の極地を得ているのではないかと考えさせられるようなレポートでした。西田哲学は言語的なものをもって存在を認識できる。言葉にあらわさなくとも、目の前にあって伝わることもある。そのような雰囲気子どもに伝わってしまう。

○教師の思いは良くも悪くも伝わっている。心の底から子どもを思っていれば子どもたちは信頼してくれるし、その逆に子どもに遠慮や忌避感が少しでもあるとそれが伝わり、子どもたちは同じように負のサイクルを回っていく。

○西田哲学を扱う際に、「恣意」と「経験」も、「自己」と「意識」も表裏一体にある。頭で感じた「知識」だけではなく体全体で感じた「認識」が大事である。言葉だけでいうのではなく、心から子どもを想い、動いていくことが何よりも上位で子どもに伝わる「純粹経験」となっていく。

○学級経営を進めていく中で、3分の1の子ども達の伸びる芽をかいているかもしれないとの自戒。

